

学校紹介 「城西学園の国際交流プログラム」(1)



神杉 旨宣（城西大学附属城西中学・高等学校校長）

城西中学高等学校は 1918（大正七）年、創立当初から英語教育を重視していた。昭和初期に女性のネイティブ教師を採用したのはその一例である。1934（昭和 14）年、城西学園に通信省で外交文書の和訳の仕事をしていた新藤富五郎先生が英語教師として赴任した。新藤先生は戦中戦後の最も困難な時にも、英語教育を強化し、戦後の新しい学園の土台を築いた。自由教育の精神が当時の軍国主義の時勢に合わなかったことを考えると、先人たちの毅然とした精神に改めて敬服するばかりである。

こうした、DNA を継承した本校は戦後の高度経済成長期を経て、グローバル教育へと歩みを進めた。1982（昭和 57）年にアメリカオレゴン州のスイートホーム高校から 2 名の長期（1 年間）留学生を受け入れ、翌年は本校生徒を派遣と、隔年での交換留学制度がスタートした。直近の留学生受け入れ数（長・中期留学生）を示すと、コロナ前ではあるが 2015 年 7 名、16 年 8 名、17 年 11 名、18 年 8 名、19 年、5 名となる。

開始当初の 1982 年から最初の 33 年間で 58 名だった留学生も 2015 年から 19 年のわずか 5 年間で 39 名と急増している。短期留学を含めると 2017 年の一年間で 155 名を受け入れている。アメリカのみならず、欧州、オセアニア、アジア、東南アジア、実に様々な国や地域から多くの留学生を受け入れている。

本校では、特に「インターナショナル…」と名が付くような特別なクラスやコースを設けていない。留学生を高校 1 学年すべてのクラスに配置し、全校生徒にとって留学生との交流が「当たり前」となっている。世界中から集まった「異なる母国語の留学生たちが日本語で繋がる」面白さが風土として根付いているのも本校の特徴である。また、当然ながら



短・中・長期の留学生の派遣も同様に行っており中学生から高校生が毎年数十名、海外へ学びに行っている。現在、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、中国、台湾の 7 か国に 13 の姉妹校・提携校をもつ。

また、中学 3 年生は全員、オーストラリアに 2 週間の研修に行く。現地校に入り、英語で学ぶ。現地校では一人一人にバディがつき、ホームステイではホストファミリーと寝食を共にする。初めて親元を離れ、子どもたちが五感をフルに働かせ、自分の力を試してくる。英語はもとより、異なる文化、価値観を肌で感じ取ってくる。

こうした、環境が城西の生徒たちにもたらす教育効果は目を見張るものがある。2023 年度英検取得率全国私学第 1 位という実績もその一つであろう。学園の空気のような自然な流れの中で、英語の必要性を実感した子どもたちが、自ら資格取得に動いたのも当然だと思われる。

校長に就任した 2022 年、新プログラム「US デュアルディプロマプログラム(以下 DDP)」を始動した。本校に在籍しながら、放課後アメリカのハイスクールの授業をオンラインで受講し、卒業時に城西高校の卒業資格とアメリカのハイスクールの卒業資格を同時に取得するプログラムだ。ビジネス学・美術鑑賞・音楽鑑賞・再生可能エネルギー・メディアとコミュニケーション・海洋学・英文学など授業が実に魅力的なものばかりである。卒業時には全米ハイラ

ンキングトップ2～8％に位置する大学を含む 30 の大学（アメリカ・イギリス・オーストラリア・UAE）の入学が保証される。また、国内の難関私大も帰国生入試や総合型選抜で受験が可能である。現在、修了生の第1号が誕生した。彼の進路先にも注目しているが、実は前述した国際交流プログラムやDDPより、校長として着目しているものがある。

数年前に内閣府が行った我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（日本・韓国・アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・スウェーデン）において、数ある質問の中で、日本人の若者が「そう思う」と回答した割合が諸外国と比べ、著しく低いものが以下のような質問だ。

「私は自分自身に満足している」 10.4％
（アメリカ 57.9％）

「自分には長所がある」 16.3％（韓国 32.4％）
「自分の考えを相手にはっきり伝えることができる」
13.8％（イギリス 35.4％）

「将来世界で活躍している」 3.8％
（スウェーデン 16.2％）
「多くの人の役に立っている」 7.3％
（フランス 19.5％）

さらに令和4年に行われたOECDの調査では、「困難に直面した時、たいてい解決策を見つけることができる」「自分の人生には明確な意義や目的がある」「全体としてあなたはあなたの最近の生活全般に、どのくらい満足していますか」これらの質問において日本人の高校生がOECD加盟国中で最下位の数値をたたいている。

この要因は、専門家によってさまざまな分析がなされ、見方が異なるかとも思うが、私は日本の若者の「自己肯定感の低さ」の表れであるのではないかと考える。

本校の国際交流の取り組みは、こうした課題を乗り越えていくために有益であると言いたい。互いの言語はもとより、価値観や文化の違いに戸惑いながらも、留学生とともに授業や部活動、行事、探究プログラム（次号掲載予定）など、学校生活を共にする。

「自分も彼らのように、アグレッシブに行動してよい、発言してよい、チャレンジすることは自分の殻から飛び出せるきっかけになる」。本校の生徒たちは、多くの気づきを得て、思考や行動に変化が生まれるのである。

前述した若者の意識調査の質問を、本校の内部進学した高校1年生に答えさせた。結果は以下のとおりである。※（）内は日本の平均値。

22％（10.4） 31％（16.3） 39％（13.8）
16％（3.8） 26％（7.3）

様々なプログラムが展開されているため、一概には言えないが、その中でも本校の国際交流プログラムが自己肯定感の定着に非常に有効な働きしていると言えるのではないだろうか。

最後に、先日行われた高校生合唱祭のコンクール予選での出来事をご紹介します。

三番目に登壇したクラスが課題曲を歌い終え、自由曲に差し掛かった時、ある男子生徒が突然倒れこんだ。すぐさま、隣にいた留学生が右手で彼を抱え込んだのだが、その留学生は正面を向いたまま、その姿勢で歌い続けた。私も含め客席に居た誰もが動揺したが、なんと倒れた男子もまた、しゃがんだまま片膝をゆっくり立てて、やはり同じく正面に顔を向けて歌い続けたのである。この日のために、何週間もともに練習してきたクラスメイトの想いが二人をそうさせたのかもしれない。不覚にも私は涙が溢れてしまった。

人と響きあう感性が豊かな中高生の時期に、そうした留学生たちとの「何気ない時間の共有」こそ、城西の生徒たちにとって、理屈ではない、実に貴重な経験となっていることを校長として実感している。



HP QR コード